ピエール・ロチ「倦怠の華」 翻訳と注（上）

遠　藤　文　彦

はじめに

以下に訳出するのは、ピエール・ロチの四番目の著作『倦怠の華』*Fleurs d'ennui,* éd. Calmann Lévy, 1882所収の同名の作品「倦怠の華」≪Fleurs d'ennui≫である（ただしわれわれが使用した原典には出版年、版数の記載がない[1]）。

同作品は、はじめジュリエット・アダン主宰『ヌーヴェル・ルヴュ』誌1882年5月1日および同15日号に発表され、ついで同年11月に上梓された上記単行本に、他の三編の小品とともに採録された。ロチの著書といったが、この作品に限っていうと、同書所収の他の三作品（「パスクワラ・イヴァノヴィッチ」、「モンテネグロ紀行」、「スレイマ」）とちがって、正確には「H・プラムケット」との「共著」とされている。「H・プラムケット」とは、海軍士官学校時代からの友人リュシアン・ジュスランのことで、ロチが彼を登場させた『アジヤデ』および『ロチの結婚』で案出した架空の名前である。

作品の形式も、ロチの発言の占める割合が格段に多いのは事実として、両者の対話からなっている。あるいは対話というより、おのおのが交代で語り合う物語、およびそれぞれの物語に対してなされる相互の論評からなっている。

さらにいうと、ロチが担当して語る「カスバの三人の女」というタイトルの、分量にして全体の約四分の一の独立した小品が作品の中に挿入されており、それが作品全体を三分割する形になっている。

本作品は、それまでの三作品――『アジヤデ』（1879）、『ロチの結婚』（1880）、『アフリカ騎兵』（1881）――が折からの異国趣味の流行に後押しされてベストセラーとなったのに対し、異国での情熱的な恋愛を素材とせず、また、そもそも一貫した筋書きを持たず、二人の話者ないし語り手の行き当たりばったりの対話、物語の交換、それらのつぎはぎからなるという、自由な、あまりに自

1　『倦怠の華』にはながらく初版のカルマン・レヴィ書店版しかなかった（もっとも上記「カスバの三人の女」の部分は、異国趣味に適う作風もあってか、その後何度か独立して刊行され、近年のロチ作品集にも収められている――この点は「パスクワラ・イヴァノヴィッチ」、「モンテネグロ紀行」、「スレイマ」も同様――のだが、「カスバの三人の女」を部分として含む「倦怠の華」の全体が再刊行されることはなかった）。しかるに、2003年、入手困難であった同書の再版がパサージュ・デュ・マレー書店版から刊行された。参考までに書誌データを示しておく。*Fleurs d'ennui ; suivi de Pasquala Ivanovitch ; Voyage de quatre officiers au Monténégro ; Suleïma,* éd. Passage du marais, Recits & nouvelles, 2003.

由な形式もあってか、当時からさほどヒットせず、今日にいたっても顧みるものの少ない作品である。

ところで、ある種の小説作法の規範から見たときの、その形式のあまりに自由な性格は容易に斬新さに反転しうる。とりわけ、今日、規範からの逸脱を価値と見たがる向きにあってはそうである（ちなみにわれわれもその向きに属す）。しかし、容易にではあっても、むろん無条件にではない。まさにそう主張しうる客観的条件を例示することこそが問題なのであって、1993年のある研究会でブリュノ・ヴェルシエが指摘し、論証しようとしたのもそのことにほかならない（Bruno Vercier, ≪Loti, écrivain en son temps≫, in *Loti en son temps－Colloque de Paimpol,* Presses universitaires de Rennes, 1994, pp. 9-19）。

ヴェルシエのひそみにならい、われわれもまた「倦怠の華」の魅力をいずれ論じてみたいと思うのだが、さしあたり本稿の目的は、われわれの知るかぎり日本語訳のないこの作品を、とりあえず日本語で読めるようにすることに尽きる。

上述の通り、「倦怠の華」は、作中に語られる物語「カスバの三人の女」を間にはさんで、全体を三つの部分に分けることができる。紙幅の都合上、今回は「翻訳と注（上）」として最初の部分を訳出し、「カスバの三人の女」は「同（中）」、最後の部分は「同（下）」で扱うこととする。

＊＊＊＊＊＊＊

倦　怠　の　華

ピエール・ロチ

H・プラムケットとの共著

刊行者による注[2]

読者のなかで『ロチの結婚』を読まれことのある方は、たぶんプラムケット[3]という名前を覚えておいでだろう。ロチの友人で相談相手、彼の旅の伴侶のことだ。ロチ同様、プラムケットも虚構の人物ではない。ロチは自作の価値が気に懸かると、書き上げた作品をまっさきにプラムケットに見てもらう。ロチはプラムケットの判断に信を置いている。だが、彼が友人の批判を聞き入れ、しばしばそれに従うにしても、必ずしもそれに反論しないわけではなく、非難された文章を必至になって弁護しないわけでもない。ロ

2　ブリュノ・ヴェルシエBruno Vercierは、この注は「おそらくロチ自身によるものであろう」と述べている（*Loti en son temps-Colloque de Paimpol,* Presses universitaires de Rennes, 1994 , p. 16）。

3　練習船ボルダ号時代からの友人で海軍士官のリュシアン・ジュスランLucien Jousselin。デビュー作『アジヤデ』でも、「プラムケット」（ファーストネームの頭文字「H」はなし）として、その「序文」を書き、ロチの通信相手として作品に登場している。

チが書いて、プラムケットが手を入れた原稿は奇妙なものだ。諸々の見解、考察、反論が、ふたりの文学談義の赴くままに絡み合い、テクストを注で穿ち、そこに黒や赤や青の縞模様を施し、いずれ劣らぬ独特の精神の味わいをかもし出している。この意見交換は、それを書き写しておいた紙片とともに失われてしまったが、そこからは共同制作による作品というアイディアが生まれた。といっても、各人の気質が全体の統一性の中で消失してしまうような共同制作ではない。ロチとプラムケットは、自分たちの人となりを保持し、作品のなかに自分たちの性格のはっきりとした刻印を残そうと欲した。『倦怠の華』を書くことによって二人は、ジラルダン夫人、テオフィル・ゴーチエ、ジュール・サンドー、そしてメリが自分たちの空想を自由奔放にはたらかせた『クロワ・ド・ベルニー[4]』のような作品を生み出そうとしたのだ。『倦怠の華』はしたがって、物語の展開の中にそれぞれの著者の独自の手法、個人的意見、そして各々の個性の本能的傾向が持ち込まれる二重の書物なのである。

プラムケット――親愛なるロチ、俗に動物には魂があると言われている。ならば君と僕にもなにかそのたぐいのものがあるはずだ。

僕らのふたつの魂――だって各々がそれをひとつずつ持っているわけだから――は、血を分けた兄弟でこそないが、倦怠によって結ばれた実のいとこのようなものだ。むろん、僕らがこの姻戚関係に気がついたのは昨日や今日のことではない。

ならば、ささやかな身内の集いを開き、君の倦怠と僕のそれとでもって、ちょっとした花束をこしらえてみてはどうだろう。僕は君にマリーゴールドを送り、君は僕にタンポポでお返しをするといった具合に。――（パンジーはといえば、それはもはや僕らにあまりなじみのない花だ[5]。）――どうだろう？

僕は万人のためになる箴言調で語ろうと思う。君は君なりにやってくれたまえ。なんでもいい、どんなことでも、どんなふうにでも書くがいい。なんなら君が見た夢の話をするのもいい。古のある賢人がかつてこういう名言を吐いた。いわく、「人より愚かとなるはいかにも難し。」この真理を肝に銘じ、安んじてことに取り掛かりたまえ。

ロチ――ではひとつ夢の話からはじめよう。

僕はクレズケルの鐘楼[6]の一番高いところに立っていた。イヴ[7]が傍にいて、花崗岩でできた

4　四人の作家が合作した書簡体の新聞連載小説。各人が交代で執筆、1845年７月９日から８月10日まで毎日『プレス』紙に掲載、翌年単行本となる。四人が合作小説という困難を乗り越え、文章の腕を競ったことから、≪Roman steeple-chase≫すなわち（競馬の）「障害物競走小説」と称す（クロワ・ド・ベルニーは当時流行の障害物競馬場があったパリ郊外の地名。

5　パンジーはフランス語で「パンセ」≪pensée≫、「思考」の意味を持つ。それに「あまりなじみがない」とは、話者の非合理主義的立場の表明と読める。

6　ブルターニュ地方の町サン＝ポル＝ド＝レオンにある壮麗な鐘楼。

7　イヴ・ル・コール、1852年ブルターニュ生まれの水夫、『倦怠の華』の翌年1883年に発表される『弟分イヴ』の主人公、『お菊さん』にも登場。二人は1867年、練習船ボルダ号で出会い、1877年トネール号にて再会、以後互いを兄弟と呼びあう仲になる。

樋嘴[8]の頭の上に腰をおろしていた。遠くに望めるレオン地方[9]の波が眼下に広がり、夢の中の光景を照らす神秘に満ちた薄明かりに浸っていた。

季節は冬で、ブルターニュの荒地は黒ずんでいた。――彼方に「霧の海」が見え、ロスコフ[10]の岩礁がダ・ヴィンチの描いた背景のように重なり合っていた。

僕はイヴに言った――「クレズケルの鐘楼が揺れたみたいだ。」

イヴは答えた――「兄貴、よくもまたそんなばかなことを。」彼は笑って虚空を見つめた。

僕はめまいがして、空中に僕らを支えている花崗岩のレース[11]につかまった。僕らのまわりには見事な石の凹凸と、小人の姿を象った樋嘴があった、――そこにブルターニュ地方のすべての古い鐘楼を黄金色に染める黄色い苔が生していて、ちょうどそれらの小人が冠羽や山羊ひげを生やしているように見せていた。鐘楼の裾の方は、ぼんやりとして見分けがたく、漠とした線をなして地上の暗闇の中にかき消えていた。

イヴはいつもより大きく見え、肩幅も一層広く、よりたくましい感じがした。

「イヴ、と僕は言った、たしかにクレズケルは揺れたぞ。」

... じっさい、ブルターニュ地方のこの伝説の古い鐘楼は土台からぐらついていて、それが地面に倒れてゆくのが感じられた。古の花崗岩のレースは少しずつ崩れ、中空に砕け、破片が落ちていった。それはまるで重さを持たない物体の落下のように緩慢で柔らかな崩落であった。僕らもまた落ちてゆき、なにか物につかまろうとしてもがくのだが、その物もまた落ちてゆくのだった。

... つぎの瞬間、僕らは、なおも砕け、消え去り続ける残骸の中、地面をさ迷い歩いていた。

――落ちたのに、なんのけがもなかった、――ただ、クレズケルの鐘楼がなくなってしまったという思いから、胸苦しい不安を感じていた。

イヴと僕はともに「霧の海」を航海していた頃のことを考えていた。沖合に出て、西からの大波に揺られ、波しぶきと雨とに濡れながら、冬の暗鬱な日々、冷たく不吉な夕暮れ時に――、しばしば灰色の雲のかかる中で、僕らは遠くからサン＝ポル教会のふたつの鐘楼と、その傍らで、断崖の上に立ちそれらを花崗岩の高みから見下ろしているクレズケルの鐘楼を目にしたものだった。――荒れる夜になりそうなときなど、ブルターニュの崖の上からまるで僕らのことを見守ってくれているような、あの古い海の見張番を見るのが好きだった。いまはそんな時代も終わり、もうけっしてあの鐘楼を目にすることはないだろう。

とくにイヴの方が鐘楼の倒壊に心癒されずにいた。――僕は彼に言ってやった。「建て直せばいいじゃないか。」――しかしその僕にしても、この喪失は取り返しのつかないものと感じていた。じつにそれは浜辺の砂利ほどのあまたの断片となって地面に散らばっていた。――過去の幾世紀にもわたるこの見事な建造物が破壊されたこと、僕にはそれが時の運命的兆候のように思われた。

8　「ゴシック建築などに見られる動物や怪物をかたどった軒先の吐水口」『小学館ロベール仏和大事典』、ガルグーユ（仏）、ガーゴイル（英）。

9　サン＝ポル＝ド＝レオンを中心都市とするブルターニュ地方の一地域。

10　サン＝ポル＝ド＝レオンが面しているモルレクス湾の北の突端に位置する小さな港町。景勝の地。

11　ゴシック教会の鐘楼屋根の石積みを喩えて「石のレース」と称す。

この巨大な鐘楼の最期が万物の終焉のはじまりのように思われたのだ。——そうやって僕は、すべてが終わりを迎えるのをやるかたなく眺め、混沌への黙示録的な期待のなかで、ある種の瞑想に耽っていた。

周囲を見回しても、古都サン＝ポルは、そしてイヴが生まれた家も、すでにあとかたもなく消えていた。僕らは暗くて人気のない、エニシダやヒースが生える荒地のただなかにいた。大地は、無に帰する前に、ふたたび原始時代の様相を呈し、僕らを包む最後の暗闇がその厚みを増してゆくのだった。

するとイヴが、おびえた子供のような声で言った。——「兄貴、僕を見て、いつもより背が大きくなったように思わないかい？…」——僕は「いいや」と答えた、——彼を不安がらせないように。しかし、たしかに彼の姿は実際より大きく見え、さらに今度は、狼の毛皮を肩に掛けて、ケルト人のような格好をしていた。僕らの周りには、いやましに濃くなる暗闇の中、芋虫のようなものがうごめいていた、そこで僕は、僕らふたりともすでに死んでいるのだということがわかった...。

... それから、不吉で、漠とした想念が徐々に消えてゆくというところで夢は終わった...

——それら不可解なものごとを言い表しうる言葉はもはや存在しない。

. . . .

プラムケット——親愛なるロチ、君の夢はこんなふうに説明できるだろう。君は弟分のイヴと低地ブルターニュのとある酒場のテーブルの上で横になっていた。シードルとブランデーを飲んで、すっかり酔っ払っていたのだ。そこで君たちはテーブルの下に転げ落ちた。それが幸いにも少しも怪我をしなかった君たちの柔らかな落下の正体だ。たぶんイヴが先に落ちて、その上に君が落ちたのだろう。クレズケルの塔、それはきっと君たちがひっくり返してしまった大きな空き瓶にちがいない。同じく落下していた物体はというと、それは君たちの足下で砕け散ったコップであり、芋虫は、君たちがぐちゃぐちゃにした場所を片付けていた酒場の女主人と女中たちであった。

ここにはごく自然なことしかない。ただ君は、ものごとの終わりの始まりについて、見当違いの省察に耽っているだけなのだ。要するに、親愛なるロチよ、それは飲み干された一本の酒瓶のことにすぎない。加えて、君たちが鐘楼とみなしていたその酒瓶が空なのは、君たちが飲んでしまっていたからにほかならない。しかるに、飲んでいる酒瓶が空にならないようにといったって、それは無理な話だ。

人生の始まりにおいて、すべての盃は満ちている。後になっても何かしら残っていて欲しいのなら、ゆっくり呑みたまえ。あまり早い時期から強い酒を飲んではならない、そんなことをすれば甘美で健全な風味を感じ取ることができなくなってしまう...

ロチ——親愛なるプラムケット、僕の夢についての君の説明はナンセンスだ。僕が四分の三はイスラム教徒だということは君もよく知っているはずだ。それに僕が酔っ払ったのは生涯たったの一度きりだということも。あれはニューヨークでのこと、ある禁酒会の宴席に招かれたときだった。あのときは警官が僕を艦まで連れて帰ってくれたのだった。

プラムケット——馬鹿なことを言って話の腰を折らないでくれ、ロチ、たまに僕がまじめなこと

を言っているというのに。たしかに、不幸にも僕は君が持たない唯一の欠点に陥ってしまった。だが僕は、君の好きな東洋人たちのように例えで話をしているのだ。酒に酔うことよりよほど危険な酩酊が他にもたくさんある。そういった酩酊のことは、ロチ、君も知っているではないか...。

・・

いまや盃は空となり、テーブルの花は萎れている。客は失せてしまった。ある者は酔い痴れ、他の者はそれを見て怖くなり、逃げてしまったのだ。君ひとりが残り、残骸を載せたテーブルについている。まだ呑み足りないのだ。何をするのだろうか。かような宴の後に、またさらに別の宴を求めに行くのか。否、そんなことをしても不愉快なだけだ。君の周囲がすっかり闇に包まれてゆく。もう何も見分けがつかない。そこで君は言う、「終わりの始まりだ」。——何の終わりか？ありとあらゆるものごとの終わりか？——否、終わったのは君自身の宴にすぎない。

というわけで、いいかね、君の省察は夢の中でさえ常識を備えていないのだ。

ロチ——あまり愉快ではないね、プラムケット、君が送ってよこすその最初のマリーゴールドは。それに、人生を宴にたとえるなんて、なんとも月並みじゃないか。僕を恵まれない客とでも呼んでいたら、その方がよほど新奇だったろうに。プラムケット、君のマリーゴールドはずいぶんとありふれた花でさえあって、それも、ひょっとしたら通りがけに管理人の庭で摘んだものかもしれない。

そこで僕は、君に下らない説教などされないような、適当な話題をじっくりと探してみた。

どうやらそれが見つかったように思う。実際それは、僕がまだぜんぜん何にも酔ったことがない頃の話だ。

五月のことだった。僕はまだほんの小さな子供だった。たぶん生まれてはじめての春ではないだろうが、おそらく二度目か、せいぜい三度目の春のこと...

散歩から帰ったばかりで、夕方だった。

僕は、あの家、君も知っているあの家に戻ったところで、中庭に入ると、夕闇が迫ってきていて、漠然とした愁いを感じた。愁いといっても、素晴らしくいい天気だったのでじつに甘美な愁いであった。生暖かく澄みきった黄昏時、暮れなずむ春の宵で、周りにはジャスミンとスイカズラの匂いが漂っていた。

僕はピンクのかわらしい服を着ていた。いまでも目に浮かぶようだ。その晩着ていたのは、子供時代の服で唯一記憶に残っている服だった。おかしいだろう、ピンクの可愛い子供服を着ている自分の姿を思い浮かべるなんて... それに、少なくともそのような思い出を語るのはじつに誠実で、またじつに無邪気なことだ。

それにしてもなんて奇妙なことだろう、いまだそれほど遠くない過去に、新参者としてこの世のさまざまな出来事に立会い、はじめての春に目を見張っていたなんて... すでにたくさんのことを理解できる知性——なるほど漠然とではあるが、かなり複雑な印象を受け取ることのできる、ちっちゃなお頭は備えていた。しかし、それまでまだなにひとつ目にしたことはなく、五千年前にはじまった人類の進化についても、自然の再生の永遠に変わらぬ回帰についても、なにも知らなかったのだ... それら一切を、いわば思慮深い驚きをもって眺め、そこに、先行する事柄の混濁し神秘に

満ちた追想のようなものを混ぜ込んでいた... われわれはどこからやって来るのか？... 以前とか、手前といったものは存在するのか？... 後の人生において僕は、その存在を確信する瞬間がいくどもあった。しかしそうなると向こう側もまたあるということになろうが、その向こう側なるものは、じつに深い闇に満ちていて、僕を震えさせるのだ。

——やりかけの話からだいぶ逸れてしまった。話を元に戻そう。それにしても不思議じゃないか、世界を駆け巡り、現在のすべてを見、奥深い過去の一切を解き明かし、なにもかもを理解し、反芻しつくしたというのに... ほんの三十年前にはまだこの世に生まれたばかりだったのだ。そして夕方がだんだんと長く、暖かくなってゆき、古い壁の上に白いバラが咲き、春の祭典がはじまろうとしているのを見て驚いていたなんて...

さて庭の話だが、プラムケット、君もその庭のことは知っているね、わが家の中庭のことだ。そこは草木が茂り、花々が咲く小径のようになっていて、奥の方は鬱蒼としている。植物が密生しているからで、片側は木蔦に覆われた高い壁になっており、葡萄や、藤や、薔薇など、ありとあらゆる植物の大きな枝が垂れている。その反対側、南側はごく低い壁で、ジャスミンとスイカズラの茂みの中に埋もれている。——隣家の庭がその向こう側にあって、その上に広く澄んだ空が見渡せる。

その日の夕方、南側と西側とに広がる空は、美しく澄んだ黄色に染まっていた。見上げると、上空は緑色がかった青色で、まだずいぶん明りが残っており、枝垂れた枝がその上に細く黒い切抜き模様を浮かび上がらせていた。そのとき僕は、壁越しに果樹の梢の間から見えていた、ずっと遠くの空に浮かび上がるなにものかに、不安な思いで一瞥を投げた。そのなにものかは、しかしながら遠方にごく小さく見えるだけだったが、それでもその輪郭はずいぶんと異様であった。そのなにものかとは、すなわち一軒の古い家の切妻で、そこに取り壊された煙突のようなものがついていて、全体がなにやら狼に似た動物の形をしていたのだった。——その獣の形を、僕は何年にもわたって何度も見た。それが見えるのは、夕方、黄金色に沈む夕陽を背景に黒くくっきりと浮かび上がってくるときだけだった、——とくに夏の夕方、散歩から戻ってくるときがそうだった。獣の形は悲しそうに見えた。その様子は、子供の時分、夕方になると捉えられた、あらゆる憂鬱な思い、あらゆる恐怖の感情と混ざり合った。

その後何年も経ってから、僕はあの空の一隅に、久しぶりにあの狼の形を探し求めたのを思い出す——長期にわたるポリネシア遠征から故郷に戻ったある日の夕方のことだった。そのときの僕は、きっと昔日の愛する懐かしい思い出のようにそれに挨拶をしたことだろう。しかし、それはもうそこにはなかった——僕がいない間に家が取り壊されてしまっていたのだ。——生い茂るジャスミンとバラの枝の向こうに見えるのは、隣家の梨の木の梢と、石榴の大木の群れ咲く赤い花だけだった。

. . . .

——すまない、プラムケット、また長々と脱線してしまった。

五月のとある夕方、かわいいピンクの服を着て家に帰ってみると、数日の間にすっかり草花が芽吹き繁茂しているのを見て驚いたという話だった。——壁から垂れ下がっていたあの植物の塊が、いまこうしてこんもり生い茂っている様はじつに見事なものだった。仰ぎ見れば、頭上、緑陰はさ

らに濃く、温くて甘い匂いに満ちた影を投じていた。――そしてあのヴァージニア・ジャスミンの大きなアーチ。――たしかしばらく前には冬の月が、複雑に絡み合ったその枝を地面に映し、細かな黒い線を描いていた。いまやそれが花と緑にぎっしり覆われた丸天井となり、その下に暗がりをなしている、――その円屋根の陰で無数の羽虫が踊っていた。

――僕はよくその下で、手を後ろに組んで（これは小さな子供が考えにふけっているときのポーズだ）散歩をし、いろいろなことを理解しようとしたものだ...

そしてその後、だんだんと長くなっていき、澄んだ薄暗がりとなっていつまでも続く日々、そしていたるところに咲く花々、上昇する気温、強さを増す光、いままさに訪れつつある輝き... そう、それらすべてが未知のなにものかについての漠とした観念を僕のもとに運んできてくれた。それは夏！僕のはじめての夏だ！... それ以前の夏の記憶はなかったが、このときの夏は僕の幼い頭を混乱させ、僕を大いに魅惑した。

――さて、ここからが僕の話の本当のはじまりだ。

その日、中庭の片隅に砂のいっぱい入ったプランターがあった。一日中僕はその砂をかき回して遊んだのだった。さいしょにシャベルを使って小さなお団子をこしらえた。それからその砂のお団子を全部平らにして小径を作り、それに沿って小さな花瓶とアーチ状に曲げたクレマチスの枝を並べておいた。

例の瞑想のポーズでぽつぽつと散歩していたところ、僕はふと昼に自分が作ったあの庭のことを思い出して見に行った。

夕方になってクレマチスはいい匂いを放っていた。枝はプランターを覆いつくし、回りに垂れていた。白い小さな花はまだ全部見えていたが、薄暗がりの中でふわふわと軽く、まるで鳥の羽毛のように見えた。その様子がいまでも目に浮かぶようだ。

僕はむしょうにその庭に入ってみたくなった。そこに入って、中のミニチュアの小径に腰を下ろし、クレマチスの下にうずくまってみたら、どんなにか気持ちがいいだろう。

しかし、なるほど庭にはちがいなかったが、それはあまりに小さすぎた。自分でもそれはよくわかっていた、中に入るには小さすぎるということを...

それでも試してみることはできる... 熟慮の末、ものの釣り合いについての知識を総動員してみてから、片足を縁に置き、体を持ち上げて乗ってみた。

――悲しいかな、プランターは壊れた。砂も、小さな花瓶も、花も、みんなひっくり返った――そして、プラムケット、僕自身ものけぞって尻もちをついてしまったんだ。僕はうんと痛くして、わんわんと泣き出した。

すると女中がやってきて僕を抱き上げ、ム̀ー̀ル貝獲り̀というとても陽気な地元の古い唄を歌いながらあやしてくれた。

その後の僕の人生において、無茶なことをして転んでひどく痛い思いをするたびに、そばに誰か僕を抱き上げてくれるひとがいて、ム̀ー̀ル貝獲り̀であやしてもらっていたら、たぶんその痛みも和らいでいたと思うのだ...

プラムケット――なんて甘ったるい感傷だ、まるで軟弱じゃないか、哀れなやつ！――そんなに早くからそんなふうに夢想に耽るようになるなんて、腕白小僧みたいに輪回しでもして遊んでいたほうがよほどましだったろうに。

それにしても本当に退屈でうんざりするなあ、君の子供時代の思い出話は！

ロチ――まあ待ちたまえ、プラムケット、たしかその同じ晩のことで、もうひとつ次のような出来事があったのを思い出した――あるいは一年後のことだったかもしれない... どうもふたつの春を一緒にしてしまっているようだが、まあいい。

空中になにか黒いもので、音を立てずにすばやく通り過ぎる大きい蝶のようなものが飛んでいた。僕は女中に尋ねた。

「ねえ、ゼット、あそこに飛んでいるものは何なの？」

女中はシュゼットという名前だった。彼女は苔むした石のベンチの縁に腰掛けていたが、枝垂れたスイカズラの陰になっていて、田舎女が被るその被り物の白くて大きな先のとがった部分しか見えなかった。

「あれですか、あれはアツカネズミですよ」と彼女は答えた。（僕の田舎ではコウモリのことをそう呼んでいるのだ[12]。）

――ふうん、なんだいそのアツカネズミって？

――それはね...（年取ったシュゼットはもの静かな女で、答えを探すときもいつも落ち着き払っていた。）そう、アツカネズミっていうのは、――羽の生えているハツカネズミのこと。春になると、ああして夕方ごろ飛び回って、おうちに帰りたがらないハエやコガネムシを捕まえるのですよ...

アツカネズミ！... 僕は深い瞑想に耽った、空飛ぶハツカネズミ！... それに、だいいちどういうわけでそのネズミはアツイのか？そのころ僕は悪魔の容貌が気になってしかたがなかったのだが、僕にはアツカネズミなるものが、そんな悪魔となんとはなしに似ているように感じられた...

コウモリといえばもうひとつ思い出がある。――プラムケット、この際だからコウモリにまつわる思い出のストックをさばかせてくれ。

これはもっと後の話で、僕はもう十歳になっていた。ある夏の夕方のこと、田舎にリモウーズ[13]という領地があって、それについてはあとで話すが、僕はそこの庭にいた。このリモウーズという名は、いまだにそれだけで、子供時代の光景と印象からなるまどろみの世界を僕のうちに目覚めさせてくれる。ぶなの森、ヒースの野、昔のよき牧歌的雰囲気を漂わす石ころだらけの平原、羊の群れ、イブキジャコウソウの匂い... あの地上の一隅については、万巻の書をもってしても、それが僕の幼い想像力に及ぼした魔法の力を言い表すことはできないだろう。そこに帰ればいまでもその

12　フランス語でコウモリはchauve-souris、文字通りには「禿げたハツカネズミ」だが、問題の地方ではそれをsouris chaude、すなわち「熱いハツカネズミ」と言う由。

13　ロシュフォールに近いエシレー村にある土地。ヴィオー家と親交のあったデュプレ家の領地（『ある子供の物語』参照）。

魔法の力を再発見する、そんな瞬間がときにある。――しかしそれも世の変化と年月の経過とともに薄れつつあり、そしていつかは言い表しがたいまま消え失せてしまうことだろう。

その大きな庭は、家と同じくらいとても古いもので、当時ほとんど手入れがなされていなかった。かわいそうな古い庭にはここかしこに野生の状態に戻ってしまっているところもあったが、そういう場所こそが僕のいちばん好きな場所だった。

七月の焼けつくような真昼時、僕はよくあの古壁のお気に入りの場所に登ったものだ。そこでたったひとり、暑さでむっとするツタの中に座って過ごした。ハエがぶんぶん飛びかう中、虫の鳴声に耳を傾け、太陽に打ちのめされたヒースの茂みやぶなの森、彼方には熱気を帯び静寂につつまれた平原を眺めた。それから低い声で、夏と木々に捧げる自作の賛歌を口ずさんだ。熱帯の森やアフリカの砂漠を夢見た。それらはごく幼いときから僕の想像力につきまとっていて、実際に目にするずっと前からどういうものか見当がついていた... ――というわけで、ある夏の夕方のこと、その庭を、いつになくたくさんのコウモリが飛んでいた。蒸し暑く、静かな夕方だった。いまだ西の空には、夕日が沈んだあともずっと、猛暑の夏の日に特有のあの赤褐色の残映が見えていた。その平原は森に囲まれていて、周囲からすっかり隔てられていた。鐘の音が、まるではるか彼方からのように聞こえてきた。すこしさびしげで、しゃがれたような、あわれな鐘の音。しかしそれは耳になじんだ音で、多くの鐘の音の中から聞き分けることができた。それは向こうの方、エシレー村[14]の古い教会で鳴っているお告げの鐘だった...

その庭を僕と一緒に駆け回り、僕が姉のように慕っていた女の子[15]がいた。すでに遠い昔のものとなった彼女との思い出は、僕にとって、リモワーズの森の言われざる魅力と混ざり合っている。

彼女はじつに子供らしかった、とくにその当時は。

「コウモリがみんなあたしたちのところに飛んでくるの、あんた見たくない？と彼女は言った。どうやればいいか、あたし知ってるのよ。」

すると彼女は、梨の老木の下枝によじ登り、持っていたハンカチを空に向けて振りはじめた。

なるほど、コウモリたちはあわてふためき、自分たちを夕闇の中に舞い踊らせるその白い物体は一体何だろうかと思い、残らずこっちにやってきた。僕らのすぐそばを掠めるものさえあって、こっちにぶつかってくるのではないかと怖くなり、走って家の中に逃げ込んだ...

. . . .

コウモリ、哀れな生き物、みんなの嫌われもの。僕にとっては、晴れた日の暑い空にだけ飛ぶ夏の夜の動物... 連中が醜いのはしかたない、許してやろう、だって彼らは僕の思い出の中の、美しい夕べの澄んだ空を幻想的に飛んでくれたのだから、そしてわが子供時代の夏の記憶と混ざり合っているのだから...

. . . .

14　前注参照

15　リュシー・デュプレ。リモワーズの所有者デュプレ家の娘で、8歳年上の幼馴染。結婚後、海外領土ギュイヤーヌに移り、病を得て帰郷の翌日に死去。その死は15歳のジュリアンの精神に大きな打撃を与えた。『ある子供の物語』参照。

後年パリで[16]、僕はラテン区にある、冷たくて、灰色で、教科書やノートで散らかった、とあるちっぽけな学生アパートに住んでいた... 黒板とチョーク、醜悪で陰気な品々。

当時僕は十七歳だった。学業に費やした冬、それは生まれてはじめての疲労と嫌悪感に遣った長い倦怠の季節だったが、その冬が過ぎ、自然の法則に従って春が訪れた。

五月のある夕方、天候も暖かくなってきていたので、僕は建物の最上階にある自室の窓に肘をついて外を眺めていた、――どこかへ逃げ出すとことを夢見ながら... そこからは煙突や古ぼけた黒い屋根が望まれ、サン＝テチエンヌ=デュ＝モン教会とサント＝ジュヌヴィエーヴ教会[17]の鐘楼が見えた。それら一切の陰鬱なものの上に暮れて行くこの美しい夕方が僕には奇妙に感じられた。パリにはけっして春なんか来ないだろうと思っていたのだ。

それでもやはり春は来ていた。穏やかな夕方で、眼下の窓辺には、あわれなリラの花が咲いていた。

日が暮れようとしているときだった。突然、二匹のコウモリが窓の下を狂ったようにぐるぐる飛び交うのが見えた... この二匹のあわれな動物に出合えて、なんとうれしかったことか！僕にとっては春一番のつばめよりも、この二匹の最初のコウモリこそが、休暇と旅立ちと自由とを告げる、真の夏の使者だった。

もとより僕は、あの暗い穴倉には戻らないつもりだった... そしてじっさい戻らなかった。よそに逃げ去る機会が与えられ、僕は遥か彼方に飛び立った。カルチエ・ラタンには二度と戻ることはなかった...

正直言って、プラムケット、僕は高校[18]にはぜんぜんまじめに通わなかったが、かといってあまりカルチエ・ラタンをうろつくこともなかった。あそこで過ごしたといっても、ほんの一年ほどで、ようやくそこがどういうところかわかった程度だ。人並みに左岸のいろんな店にも出入りした。だが、僕の行動にはむらがあり――つっけんどんだったり、おずおずしていたり――、おびえたようなところがあって、まるで大きくなってから捕まってかごに入れられた鳥のようだった。びっくりすることも多かったが、思い出すのはどれもこれも味気なく、むかつくような、いかがわしいことばかり。そんな生活を讃美するやつも大勢いたが、僕はといえば、屋根裏部屋や、尻軽女工や、居酒屋に詩情を感じたことなど一度もなかった。

... コウモリといえば最後にもう一匹、ほかのコウモリに導かれて記憶によみがえってくるが、しかしこいつはとてつもなく大きなコウモリで、熱帯に棲む巨大な恐ろしいルーセットコウモリの一種だ。

ギニア沿岸地方に、知り合いで、みなにバレス爺さんと呼ばれている年寄りの海賊がいた（これはずいぶん後の、二十三歳頃の話で、それまでに僕は世界の五大州をすでに巡り終えていた）。

16　ジュリアンは地元で受験して落ちた海軍士官学校の再受験準備のためパリに上京、1866年10月、リセ・ナポレオン（現アンリ四世高校）に入学する（翌年７月同士官学校受験合格、10月入学）。

17　ともにカルチエ・ラタンの中心部にある教会。

18　前注参照。

バレス爺さんは変わり者で、かの地の商館ではかなりの有名人だった。今日ではついぞ見かけなくなった種類の人間で、素性の知れぬ白人と黒人の混血、元海賊で、奴隷商人――用がなくなると、所有する黒人女を、自分が産ませた子供と一緒にまとめて、一番いい値をつけた相手に転売するのだった。ありとあらゆる手段を用い、いつも取引相手を騙していた。

しかしながら根はいい人間で、高笑いして白い歯を見せながら、よくこう言っていた。「俺はな、皆の衆、くたばるときには、とにもかくにもいい人生だったと言えるだろうよ！」じっさいその通りであって、彼はいかにも昔の海賊らしい破天荒な生涯を送ったのだった。幸運に恵まれた輝かしい時期さえあった。マンデ地方[19]のとある場所に行くと、かつて彼が風変わりな宴を催すのに建てた豪邸の跡をいまだ見ることができた。

晩年、隠棲の身となってからは、フランス政府からポンガ川[20]の統帥権を得た。そして、黒人の首長たちとずっと以前から取り結んできた同盟関係のおかげで、見事に任務を遂行した。彼はまったく臨機応変の人物だったのだ。

ある日、バレス爺さんが死んだということを知り、早速ポンガ川に馳せ参じた。そこは彼の死後、反乱分子の手に渡り、無政府状態に陥っていた。

到着してみると、老海賊の小屋は、エキゾティックな大樹の陰に隠れて、差し金が掛けられ入り口が塞がれていた。死者が出て以来、誰も足を踏み入れておらず、われわれの到着が相続のために待たれていたのだった。

戸を開けると、中からむっとするような熱、耐えがたい空気が漏れてきた。見たこともないような品々がいたるところに散らかっており、不気味に積み重なっていた。壁を見ると褐色のルーセットコウモリが一匹張り付いていて、コウモリの習性から頭を下にして眠っていた。光が差してきたところで驚いて目を覚まし、手の生えていない部位を広げてぱたぱたと飛びはじめ、狂ったようにいたるところにぶつかった。

ブルターニュ出身の水夫が怖くなってそいつを棒で叩き殺して、こう言った。「こいつは爺さんの魂だ！」

僕もただちにこの気のいい若者の意見に与した。じじつそれは老人の魂以外の何ものでもなかった。そいつは、それより上に登ることができずにここにやってきて、おぞましいけだものの姿で壁に張り付いていたのだ。

そのルーセットコウモリはいまでも僕の家にいる――世界中を旅して持ち帰った風変わりな品々や記念の剥製がしまってある陳列部屋に。――広口瓶の中でエタノールに漬けられて首をかしげ、舌を出し、見て気持ちのいいもではないのでカイマンワニの後ろにちょっと隠してある。小瓶には一枚のラベルが貼ってあって、潮風に当たって少し黄ばんでしまってはいるが、バレス爺さんの魂と書いてある。

19　西アフリカ内陸部、現在のギニアとマリにまたがる一帯。
20　詳細不明。

生前この老奴隷商人は、俺の魂は悪魔が相続するだろうよ、と言っていたが、それはまちがいだった。爺さんの魂を手に入れたのは、この僕だった...

プラムケット――どのみち同じことだ。だって仕方あるまい。結局その爺さん、最後は君の手中に収まったからといって、それも当然の報いなのだから。

三番目のマリーゴールド

親愛なるロチ、僕らはいたるところで退屈するのだから、よその場所しか居心地がよくない。だから時折、僕らが今いるあらゆる場所を離れてよそに行くのも悪くはない。普遍的没意識と絶対的忘我からなるある種のどこにもない場所、そういうものがあったらどんなに素晴らしいだろう！そのような虚無――夢を見ることのない永遠の眠り、あらゆる夢よりも甘美な眠り――、それが存在しようとしまいと、僕はそれを愛する...

それゆえ、未来の世代の腐植土となるべき肉と骨でできたこの古着を、どこかそこら辺に打ち捨ててゆくことができたら、どんなにいいだろう。考えてもみたまえ、こいつに食べ物をやり、服を着せ、人前に出せるようそれなりの格好をさせなければならない。しかもそれは、その見返りに、僕らをありとあらゆる愚言愚行に巻き込むのだ。

僕らの魂が金色の羽をもつ軽やかな蝶のように、あのいやらしいさなぎから遠く、はるか遠く離れて飛び立つ瞬間、それはどんなにかいいものだろう！（ねえ君、勘弁してくれたまえ、この金色の羽の蝶という喩えは、もしかしたらあまり新味がないかもしれないね。）

そして、そのさなぎから飛び立つものが〈無〉であるならば、――その価値がいや増すばかりだ！

その気になればこの〈未知なるもの〉への跳躍を試みることはできる。しかしそれは飛翔なのだろうか、それとも墜落、あるいはまた無？... しかも僕らは、そんなことをする習慣がないので（だって生涯に一度のことなのだから）、つねに思いとどまってしまい、人生で最も素晴らしい日、つまり死ぬ日をいつも遅らせてしまうことになる。

それゆえ、時もしくは出来事の破壊力によってその幸福な瞬間が訪れるまでの間、――二人とも、あちこち旅して回ろうではないか、――どうだろう？

旅立つ前に、僕らが銘々自分の持ち物で置いてゆくべきものをすべて置いてゆくならば、なにも残らないだろう。そうなるとだれも旅立つことはないだろう。したがって旅することがなく、それゆえ語るべき物語、マリーゴールドもないだろう。あるのはただの空白のページだけ。ところで、そのような文学を理解しうる読者が西洋の国々――その文明はいまだ相対的に幼児段階にとどまっている――にはまず存在しない。なにをおいても空白のページに興味を示すというような読者は、東洋にしか、絶え間ない瞑想――そこに彼らは自分たちの漠然とした考えをいかにも首尾よく捨て去ってしまうのだ――によって英知の極みに達した数千年の歴史を持つ人々のうちにしか、見出すことができない。それももっぱら苦行僧や修行僧のうちに。

そう、西洋では、それらのページは一列に並び、句読点を打たれた黒い小さな文字に覆われていなければならない。だから、僕ら以前に他の多くの人がそうしたように、偽りの流行に従うことにしよう。物語があって、二人の登場人物がいて、彼らが旅するどこかある場所があって、という具合に。

どこに行こうか？それが問題だ。なにをしようか？なにを言おうか？あまり考えすぎないようにしよう、といのも僕らは出発しないだろうから。なにをするか考えるのはよそう、というのもわれわれはなにもしないだろうから。なにを言うか考えるのはよそう、というのも黙することは語ることにつねに勝るのだから。なにもないはなにかあるにつねに勝る。

かくも純朴かつ抜け目のないロチよ、君はおそらく、僕が君を公証人見習の言うところの「理想の高み」へ連れて行くとでも思っているのだろう。

いや、とんでもない。とどのつまり理想なんてものはあまりに愚かしい！それに、猫も杓子も理想を持とうとしているわけだから、あまりにありふれてもいる。

それゆえ僕が連れてゆこうとしているのはあくまで地上の国で、つまりは中国だ。それというのも、君のお得意のポリネシアやイスラムの国々[21]——いまやこの上なく陳腐なところ... ——から一休みするために。

だが、ちょっと待ってくれ、この共同制作の旅物語に真実味を持たせる必要がある。はっきりしているのは、僕らが、楽しくてユーモア溢れる感想を交しながら、寄り添って旅する仲のよい旅の道連れとして、粛々と当の旅の準備を整えることなどできなかったということだ。というのも、例によって出発前に喧嘩となり、結局一緒には出発しなかったようなのだ。

——「ひどく骨が折れるなあ、この出発は！いったいこの二人の旅人は、出発するのか、しないのか？」と、読者は心配になる。

——「もちろん出発しますとも。いましばらくご辛抱ください。出発前にかならず新しい荷物を積み込んで、なかなか発車しない田舎の乗り合いバスに乗り込むときのようなもの。いましばらくのご辛抱。夜明け——それも極北の夜明けですが——とともに出発いたしましょう。よろしいですか？」

——さあ、急いでなにか真実味のある話をこしらえよう。みながよく出会う交通量の多いありふれた場所、たとえば凍結した渤海湾で、ある冬の夜、午前一時に偶々出くわしたということにしよう。

僕は表面が獣の皮でびっしり覆われたラクダの毛のセイヨン[22]を着ていた。肩に掛る長くて白いつけ毛、長くて白いつけ鬚。ずた袋を肩に掛け、手にはわずかなお金を握っていた。——君は毛皮で起毛したビロードの粋なジュストコール[23]にきっちり身を包み、大振りのじつにロマンチックな

21　本作品以前に発表されたロチの三作品は順にトルコ（『アジヤデ』1879年）、ポリネシア（『ロチの結婚』1880年）、セネガル（『アフリカ騎兵』1881年）を舞台とする「異国趣味」の作品である。

22　農夫や羊飼いが着た外套。

23　おもに男性が着た身体にぴったりした膝丈のコート。

コートを羽織っていた。額には「運命の印」を刻み、頭には赤い羽根飾りの付いた美しいビレッタ[24]を被っている。

こんなふうに妙な格好をするに及んでは、二人で示し合わせておいたのだ。なぜかは君も承知の通り。つまりは、おのれの倦怠を連れ歩く旅の途中、この地球上のどこかで出会ったときに、お互い相手が分からないようにするためだ。——この地球はわれわれ二人にとってはいつだって狭すぎた。どこに行っても、いたるところで出会ってしまうのだから。

こんな風にすれば、出会いは偶然に生じることになり、互いの第一印象は申し分ないものとなる、というわけだ。

... 氷の平原が見渡す限り四方八方に広がっている。我慢強い読者に約束された極北の夜明けの幻想的な光があたりを燃え立たせ、見事な色に染め上げる...

ロチ——その夜明けの場面は、プラムケット、ひとつ僕にやらせくれたまえ。面白そうだ。北の海で当直の夜に何度も見てきたから、うまく語って聞かせることができるだろう。
こうだったね。

「極北の光が燃え立たせ、見事な色に染め上げる...」、その夜と、その人気のない平原とを。上空の反射光が、僕らを取りまく氷塊のきらめくクリスタルを通過して分解され、あまたの虹となる。まるで隅から隅まで宝石でできた世界のなかを歩いているようだ。

頭上に漂う雲は暗い赤色をしている。濃い血の色だ。

そのとき大きな青白い光線が彗星の尾のように空を横切ってゆく。幾千ものそうした光の矢が、広大無辺の暗闇の奥に消えて見えないどこか神秘的な中心——磁極——から周囲に放たれている。光の束、光の集まりが延びてゆき、形を変え、ふたたび現れては消える。この奇妙にも壮麗な光景は、たえず変化し、じっとしていない。

ひとが磁気と呼んだのは、このとらえがい未知の力の輝きのことなのだ。今宵、その隠微な力は、冬の夜、かの極北の地で大いなる饗宴を催している。それは光を放ち、幻惑し、不安を誘う。未解明で、不可解で、亡霊のごときものの恐怖をまき散らすのだ。

絶え間ない振動のようなものが、この光全体を揺り動かす。ざわめきが聞こえ、ぱちぱちとなっているようだが、——耳を傾けてみると、——何も聞こえない... それは大いなる無言の幻影にすぎない。その炎は冷たくて命を持たない。この天空、この凍りついた海は、まったき静寂の世界。

プラムケット——まさにその通りだ。この雄大な環境が僕らの神経に作用して、ロチと僕は一切の日々の束縛から解放された。僕らはこれによっていっそう相手を迎え入れやすくなる。

はじめに僕が君を呼び止める。「わしはアハシュエロス、通称さまよえるユダヤ人。懐には二十五サンチーム、他に金銭の当てもないまま、一八四九年前からこうして、最後の審判の日まで世界中を巡っている。では若者よ、お前はきっとわしのあわれな物語を聞いたことはあろうと思うが、

24　聖職者の四角い縁なし帽。

お前はだれなのか？」

君は答える、「チャイルド・ハロルドだ。僕はありとあらゆる酒盃を飲み尽くした。ありとあらゆる美酒に酔い、そしてまたありとあらゆる苦杯を嘗めもした。いまだ若いが、あらゆる芳香、あらゆる瘴気を嗅いだ。額には、老人よ、見ての通り運命の印を刻んでいる。ほら、ここだ、両の眼の間に。こうして、一切のものに満ち足りて、一切のものに倦み果てたいま、一切のものとは別のものを探し求めているのだ。」

アハシュエロス「若者よ、お前の話はわかりにくい、だが、そんなことはどうでもいい、わしはお前が気に入った。北に行くのか、それとも南？」

チャイルド・ハロルド「風が枝から離れた葉を吹き飛ばす方角へ行く。」

アハシュエロス「おや、ちょうどわしもその方角に向かっているところだ。一緒に来たまえ、そうすれば、わしの思慮に富む年齢が、お前の情念の激しさ――それがわしには少々度が過ぎるように思われる――を和らげることができるだろう。百の十九倍もの長きに渡るわしの人生経験がお前の若さの導き手となるだろう...」

こうして僕らは氷の上を並んで歩む、僕はさまよえるユダヤ人となり、君はバイロン卿の作品の主人公となって。

ロチ――気の毒だが、アハシュエロスもチャイルド・ハロルドも時代遅れだ、プラムケット。それに君のお話は、まったくもって古臭い。

プラムケット――否、僕らの会話はじつに興味深いものだ。僕は君に、旅で明け暮れた僕の千八百四十九年間の人生を語る。その物語の中で僕は絶えざる他所を示し、そうやって君を僕の会話で魅了しつづけるのだ。

君の方は、僕に新しいことを語っているつもりで、摩訶不思議な習俗を持ったありとあらゆる人種のヒロインが登場する田園恋愛詩を語っている。そして君の言葉の中で、異国風の香り、東方の魅力、なま暖かい静けさ、神経に障る暑気、焼けるような砂、平坦な広大さ、もしくは広大無辺の平坦さ、等々、その他諸々の似たような表現が頻繁に現れてくる、――その一切があまたの絶望と痛恨の想いを伴いながら...

――しかしながら、まっすぐな地平線上から、前方にいくつもの小さな黒い点が浮かび上がってくる...

ロチ――失礼ながら、プラムケット、北極のオーロラを消すことも忘れてはならない、というのも、どうやら夜も明けそうだし、やがて陽が昇るだろうから。

はじめ、透かして見た血のようだった雲の色が、少しずつ変化していった。あるものはくすんだ赤色となり、他のものはわびしくていまにも消えいりそうなピンク色に染まった。

いくつもの大きな青白い光の輻が広大な空の中、四方八方に散った。あたかも中心を失ってしまったか、あるいは、切断され中心から解き放たれたかのよう。極の側ではそれらの切り口が、ハサミで裁ち切られた跡のように鮮明だ。

それでもまだ、青白い光の輻はまとまりを保っており、いく条もの揺れ動く長い筋をなして並ん

でいる。それは細かな襞のついた光り輝く薄絹の帯のようだ。

地上では感じられない不思議な微風、磁気の風が、それらの青白い光の織物をそっとはためかせる。まきついては軽やかな螺旋をなし、ほどけては漠とした吹流しのようになりながら、つぎつぎに消えてゆく。

蒼白に近い最後の赤みが、いまだここかしこ雲に映えている。

あの光り輝く薄絹の最後の切れ端が、虚空を、たえずはためきながら、あてどなく漂っている。それらは徐々に半透明になってゆく。模糊として、あとを追うこともままならない。はかなくて見失いそうだ。そしてそれらは、もうなにものでもない。北極光は消えた。いましがた北極のオーロラが消滅したのだ。

真っ暗で冷たい夜が僕らを包む。この千切られた混沌、この凝固した海のただ中で、もうなにも見えない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

プラムケット——はばかりながら、親愛なるロチ、僕らの目は暗闇に慣れているので、まだちゃんと道は見えている。それに、ほら、ぼんやりと冬のあさぼらけの明かりが射してきた。さっき言いかけていたように、前方の地平線上にいくつもの小さな黒い点が浮かび上がってくるのが見える。それらはやがて塊となり、近づくにつれてすこしずつ上昇し、最後に、凍結した湾の磨いた鏡のような面の上にぬっと立ち現れる。それから、ひとすじの褐色がかった線が見えてきて、ばらばらだったそれらの点、僕らに対して恐ろしく好戦的な様相を呈するそれらの小島をひとつにつなぐ。渤海の沿岸、北河（ペイホー）の河口、大沽（タークー）の城砦、中国だ！

さまざまな土の堡塁の間を突き進み、北河の狭くて曲がりくねった河口を見つける。このあたりの氷は不透明で黄土色をしている。水ではなくて、凍った泥なのだ。

おもむろに夜が明ける。

両方の土手に、銃眼からアームストロング砲を覗かせた西洋流の巨大な稜堡を持つ見事な砦が立っている。

それぞれの砦の上を、長い黄色の旗がはためいている。端がぎざぎざになった一種の吹流しで、そこに月を象る大きな玉を咥えようとしている緑色の竜が描かれている。僕らがいまそのただ中に侵入しようとしている中華（チェンクエ）——中央の帝国——の君主たる天子（チェンツェ）——天の息子——の旗だ。

城壁に人影が現れる。彼らは赤い飾り紐で縁取られた黒のゆったりした短衣を着ている。腹には赤い玉、背には兵士を意味するタンピンというふたつの文字が描かれている（それらの記号で彼らの社会的身分が分かる）。

頭には黒い小さなターバンを被り、そこにしっぽのように編んだ髪が巻きついている。

僕らは連中の凶悪な悪党面を観察する。表情は残忍かつ間抜け、獰猛かつ朗らか。鼻は低く、獅子のように扁平で、鷲のように湾曲している。目は小さくて吊り上がっており、口は横に広く裂け、顎は張っている。

二人の外国人旅行者がやってくるのを見て、全員身振り手振りを交えて話しをはじめ、右往左往して、わめきだす。万が一、二人がなにを考えているか連中に察しがついたりしたら！びっくり仰天して、連中の中国人の脳みそが吹き飛んでしまうだろう！

果てしなくつづく湿原。そのここかしこにぴかぴかと光る面が張り付いている。凍った水溜りだ。大きな村落、土でできた小家屋の寄せ集まり、その色は地面の色とひとつになっている。やがて別の村、こちらもやはり同じ土色をしている。つぎにもうひとつ、さらにまたひとつ。そして、エスキモーのように毛皮を着込み、例のごとく長いしっぽのような髪と、釣り上がった目の人々——連中は群れなしてうごめき、蟻のように行ったり来たりしては土手の上に立ち止まり、寄り集まって、陰険そうな小さな目を大きく見開き、僕らを見て、あらん限りの声で叫ぶ。クエ・ツェ、クエ・ツェ！（悪魔の子！）

広場はものすごい往来で、荷車や、橇、驢馬に乗る人々、分厚い毛皮を着て丸々と太った歩行者たちが往き交っている。

土手の上には家が建っておらず、派手な色に塗られて、舳先に怪獣の顔を象った陸干しのジャンクが延々と並んでいる。

つづいて、またしても土でできた村々、ジャンク、蟻のような人間たち、氷の上の荷車、黄色い旗と吹流しをつけた稜堡のある大きな砦。またしても黒い腹部に赤い玉をあしらった服のタンピン（兵士）。そして声を嗄らしてクエ・ツェ！クエ・ツェ！クエ・ツェ！と怒鳴る人々。

「——あの通りがかりの車を借りるとしよう」、とアハシュエロス＝プラムケットは言う。「あれなら三日後には北京に着いているだろう。チャイルド・ハロルドよ、わしらが乗ろうとしているラバ二頭立ての荷車を見ただけで、あまたの想念が目覚めてくる。考えてもみたまえ、親愛なる友よ、紀元前六百年に、賢者のクンフーツェがわしらのように、この荷車とまったく同じ荷車に乗って、当時も今と寸分変わらぬこの広大な帝国を旅していたのだ。中国の荷車はな、チャイルド・ハロルドよ、ダーウィンの法則に従って進化したりはしなかった——種が静止状態にとどまったのだ。」

チャイルド・ハロルド＝ロチ——「いや、騙されないぞ！... その大げさで狂った演説、その未消化な近代科学のひけらかし！... こやつはアハシュエロスなどではない、こやつは——プラムケットだ！...」

偽のアハシュエロスは、つけ毛とつけ髭、つけ鼻をはぎ取る。ロチは、額にインキで描いた運命の印を消す。ビレッタからは赤い羽飾りをはずすと、それはただの英国風トック帽のようになり、彼のジュストコールはよく見ると、もはや単なる洒落もののちっぽけな上着にしか見えない。ふたりは相手の胸に飛び込んで抱き合い、再会の喜びに、互いに与え合うのがつねの倦怠を、しばし忘れる。

いざ北京へ、出発！カッ、カッ！...「タ、タ、タ、タ！」こう辮髪の御者が叫ぶと、われらが二頭の痩せロバは速歩で走り出した。

われらが乗り物は、一対の巨大な車輪の上に載せられ、北の埃っぽい風をさえぎる青い幌で覆われている。われらがラバは揺るぎない信念をもって時速四十里（一里はフランス式にいうと四キロ）以上は出さない。

目の前の風景は、われわれに地団太踏ませるためにわざわざモンゴルからやってきた砂塵の塊からなる。それがすべてを包んでいる。だから外なんか見る必要はない、ロチ、なにも見えないだろう。話をしてもいけない、口を開けばその埃をどっさり飲み込んでしまうだろう。グリーンランド人のように丸くなってじっとしていなさい、なによりも眠ったりはしないことだ、毛皮を着ていても凍えてしまうかもしれない。

もとよりこれも、せいぜい二泊三日の小旅行。気晴らしにラバ引きでも眺めればいい。おぞましいごろつきの中国人で、頭の先からつま先まで汚く、ヤギ皮の外套を七、八枚着込んでいるので達磨のようにまん丸い。

馬車が安定走行に入ると、つまり、一対の大きな車輪が中国の鉄道（レールウェイ）たる轍の中にしっかり収まると、ラバ引きは半ばうとうとしはじめる。ラバたちもまたうとうとしはじめ、催眠術にでもかかったような、ふらふらした足取りとなる。

ときおり通行困難な場所がある。たとえば北河（ペーホー）を渡るとき。まず、土手の上から氷結した川面まで降りるときが危ない。凍った泥や汚物の堆積にひどく揺れ、激しくぶつかる。つぎに反対側の土手を登るとき。先頭のラバはひとりでに、心得た様子で左の車輪の横につく。「タ、タ、タ！」とラバ引きは、かっとなり、釣り上がった小さな目をむき出して怒鳴る。するとその賢い動物は駆け出して、か細い脚を収縮させる。「タ、タ、タ！」こうしてふたたび固い地面に登りつき、果てしない平原の旅がつづく。

またしても北河渡り！この川はわざと僕らの道を塞いでいるのだ。だが今回は丸いアーチ型の橋が架かっている。同じ作業の繰り返し。「タ、タ、タ！」荷車は橋の頂点まで登りつめると、今度は反対側の斜面を、慌てふためく哀れな二頭の駄馬を追いかけながら、憂慮すべき速度で転がってゆく。

あとはどこまでも、どこまでもつづくむきだしの大平原。ときおり木製の棺桶の列や、葉を落とし乱れた枝が風にたわむ木々の物悲しい影が目に入る。そういったものが、赤茶けた砂埃の嵐の合間に、朦々とした冬の薄暮の下、かすかに見える...

僕らの思考は砂埃の渦となり、「タ、タ、タ、」になり、鈴の音、車の揺れる音、轍の中の車輪の軋み、吹き荒れる風の唸り声となる...

こうして、いかにしても測ることのできない時が、寒くて騒々しい不断の単調さの中で過ぎてゆく。夜のとば口で、これらすべてが目覚めたまま眠る人の見る光景に転じる。僕らは暗くてほこりっぽい空気の中を地獄の獣のように小刻みに動く。二頭の醜いラバに、僕らはとりつかれてしまったのだ...

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二日目の夕刻、地平線に、銃眼のある灰色の古い城壁が、それぞれ矢の届く距離だけ間を置いて立つ稜堡とともに現われる。

ここは天津府（チェンツィンフー）、総じて辮髪で釣り目の人間が九十万も住む清き天空の都市。僕らはここで夜を過ごし、明け方に再び出発する。

この長い灰色の城壁の側面に、ぽっかりと大きく開いたアーチ形の黒い穴があって、道を示すふた筋の轍の曲がりくねった平行線がそこで途絶える。

穴の中へとなだれ込む。見るからに不気味な長いトンネル。中に入ると、もう二度と外に出られないかのようだ。

ひどい臭気が鼻を突く。隠然たる薄暗がりの中、ごちゃごちゃとうごめくものどもに囲まれ、でこぼこの割れた巨大な敷石の上を、ひどく揺さぶられながら前進する。僕らを取り囲むこの連中、この人の群れ、それは不浄な貧民たちだ。半裸で、男は髪がぼさぼさ、女は小さな足を汚い包帯に巻き、顔色は青ざめ、ほとんど死にかけた乳飲み子を連れている。ぶるぶる震え、歯をがたがた鳴らし、寒さを和らげようと隅石に身を寄せてうずくまっている。黄色い肌は半ば骨が浮き出て、体中にシラミがたかっている。体の不自由なやつには、本物もいれば、偽物もおり、憐れなのもいれば、威嚇するようなのもいる。ある者は、手を足にして這ういざり、ある者は盲目、またある者は蟹股、らい病患者、白痴、膿疱病、癲癇、皮膚病、中国人の面相を失くした潰瘍まみれの狂人。中には、哀れな嘆き節を唱え、荷馬車を取り囲み、僕らをシ・タ・ラオ・イエ（西洋のだんな方）と呼んで施しを請う者がいる。あるいは、気味の悪い笑みを浮かべ、ラバを止めようとする者、あるいはまた、じっと動かずに、死に近い虚脱状態に打ち沈んでいる者も... ラバ引きは、こういうところでは便利な手合いで、なかでも大胆なやつの惨めな顔面に強烈な鞭をくらわせながら、この「中国のエジプト[25]」を追い払う。こうして僕らは、背後に呪詛怒号を浴びながら天津の町に入る。

荷車は身動きできないほどの人混みの中をゆっくりと進みつづける。しきりに手足を動かし顔をしかめる人の群れ。羊の毛皮を着た下層民が、灰色の煉瓦造りの家々の立ち並ぶ、曲がりくねった狭い街路を塞いでいる。ときおり複雑な形の屋根をのせた巨大な門の前を通る。金持ちの館の入り口だ。だがたいてい目に入るのは、不揃いで半ば崩れかけた壁、老いと貧しさが滲むうら寂しい界隈ばかり。

とある街路を曲がったところで風景が一変する。市場に着いたのだ。

まっすぐ伸びた長い並木道には、見渡すかぎり色とりどりの看板が並んでいる。屋根から屋根へと渡された看板が、道路の両側の店に沿って垂直に垂れており、背景が無限に遠ざかる細長い絵を縁取るひと連なりの飾りのように、次から次とどこまでもつづいている。赤や、緑や、黄色いのがあって、どれにもばかに大きい金色の文字が書かれている。

25　≪Egypte chinoise≫の字義通りの訳だが、定型表現ないし引用としては見当たらない。ロチが中国の賤民をエジプトの奴隷ないしその種の民衆に例えた表現かと思われる。

毛皮の服と毛皮の帽子に身を包む商人、絹の生地やサテン地のブロケードを売る店、阿片の芳香を漂わせ、弦楽器や笛の音が聞こえてくる茶店、豚肉や犬の肉を売る肉屋、シベリヤ産やモンゴル産の高価な毛皮、パイプにシャンデリア、磁器の美術品、扇、漆塗りの家具、真鍮や青銅の腕時計...

主婦たちは、小さすぎる足でよろよろ歩き、夕餉のための買い物をしている——転ばないよう、どこかの赤や緑の服を着た子供の頭に寄りかかりながら。

こうして、人いきれのする喧騒に満ちたこの界隈全体が、赤や、緑や、黄や、青や、橙に染まる街角で、色とりどりにきらめく異様な薄明かりの中を揺れ動き、隣り合う紙提灯の明かりが漏れるたびにちかちか光る。

迷路のような街路を幾度となく行ったり来たりした後に、ようやく表門のある高い壁の前に着く。

旅籠屋だ。

ラバ引きは車から降りて、門の敲き金をドンと打ち鳴らし、怒鳴り声で「開門（カイメン）！開門（カイメン）！」（門を開けよ！）と叫ぶ。

長い交渉の後、門が開き、中庭に入る。僕らのラバは速足で鈴をやかましく鳴らす。これはいい兆候だ。中国では、たてる音の大きさに応じて尊敬を受けるのだ。

低い建物で囲まれた泥だらけの中庭、凍った堆肥の層、装具をはずされ星空に柄を向ける荷車、飼料を求めて悲しそうにさ迷い歩くラバ。

周囲には、木の格子枠に張られた紙の扉や窓。

阿片の芳香、煙る暖炉——その明かりが破れた紙の窓越しに見える——に温められた人間の垢の臭気、きんきん鳴る弦楽器に合わせて歌うほろ酔い加減の車引きの歌声、北風の吹く音、通りの喧騒のかすかな反響。

大いに叫び、宿の従業員だろうと、僕らと同じ旅行者だろうと、だれかれかまわず罵り、突き倒したので、たいそう偉い客なのだろうと思われる。

宿の主人は「チン・チン」（ロチよ、東洋で言う馬鹿丁寧な挨拶（サラメレク）[26]のことだ）をし、みずから部屋まで案内する。

通されたのは犬小屋のようなむさ苦しいところ。壁は、ジンギスカンか、その指揮官のだれかが滞在したおりに石灰で白く塗られたものにちがいない。四隅には薄手のレースが飾り物のようにかかっている。器用な蜘蛛が忍耐強く仕上げた作品だ。

家具は木のテーブルに腰掛けが数脚——どれももう脚が三本しかない。床は踏み固めた土。

ベッドとして、カンという煉瓦の台のようなものがあり、中にわらを燃やすための火鉢が入っている。

このカンと火鉢が中国における唯一の暖房器具だ。それは寒さを防いではくれないが、その代わ

26　アラビア語で、イスラム教徒の挨拶文句「あなたに平和を（サラーマライクン）」より。

り猛烈に頭が痛くなる。

マットレスは自分たちのを持参してきたので、それをカンの上に広げる。つぎに、パリ・マントン間を特急列車で行く英国人がするように食器を並べ、精力回復に是非とも必要なものをいろいろと注文する。

――「カイ・シュイ、ナレ（お湯をたのむ！）、チャ、ミェン・チオ、ファン、ナレ（お茶と煎餅と飯をたのむ！）」そしてせかすために「クエ！クエ！クエ！（早く！早く！早く！）」と、まるで悪魔に取り付かれたように目をぎょろつかせ、さかんに身振り手振りをし、近くを通る者をだれかれかまわず捕まえて、何度も押したり突いたりしながら言う。

むかつくような臭いを放つ蝋燭の明滅する光が、この室内をゆらゆらと照らしている。カンと火鉢のきなくさい煙が、ほこりだらけの顔をきれいにしてくれるお湯の蒸気や、茶碗から立ちのぼる香りの渦と入り混じる。こうして厚い雲に取り巻かれ、半ば息が詰まりながら、それでも特殊な幸福感――中国の庶民的家庭のそれ――に浸る。たぶんそれにも、阿片の効果も相俟って、そのうちに慣れてしまうだろう...

この可もなく不可もない休息の中にあって、僕らの思考は比較的正常な軌道を取り戻す。そのとき、親愛なるロチよ、君はなぜ僕が君を北京に連れて行こうとしているのか、もう分からなくなっている。僕らの出会いにはつきものの、最初の感激が昨日から冷めてしまい、好奇心の入り混じる親しみのこもったある種の関心を抱いていた本物のアハシュエロスが相手ではなかったことに少しばかり落胆して、君は突然ガンガリッドの国[27]の若い姫君と近く会う約束があったのを思い出す。そこで僕に明朝お別れするから、あとは君ひとりで北の大都会に向かいたまえと告げる。よろしい、互いに自分たちの心と考えの奥底まで赴くことを約束して、明日の明け方にはお別れだ。

しかしながら僕らの到着で皆は騒然となった。好奇心の大いなる熱狂が僕らを取り巻く。僕らのみすぼらしい部屋に不潔な連中が押し寄せてきて、僕らについてあれこれ議論をはじめる。悪がきどもが僕らに向かってたちの悪い野次を飛ばし、僕らのごく近い祖先に対して不道徳きわまりないじつに侮辱的な態度を示す。他の者たちは、僕らの装備一式を無遠慮にしつこく調べまわし、僕らがヤメリカシか、イシキリスか、ラーガンシかをめぐって議論する。どのみちクーツェ扱いされることに変わりはない。

こちらも礼儀正しさでは負けまいとして、僕らのシャツに指を突っ込んだり、僕らのフォークを口に入れて舐めようとする連中に、おもいっきりお尻に蹴りを食らわせる。そこで、ロチよ、君は持ち前のサヴァット[28]の才能――おおいに重宝がられている才能――を発揮する。

首尾よくこの汚らしい下層民を追い払うことができた。

顔をお湯（カイ・シュイ）につけ、腹に茶（チャ）・煎餅（ミエンチオ）・飯（ファン）を詰め込んだところで、カンに寝るとしよう。夜の奉仕を

27　ガンジス川流域のインドの一地方。ヴォルテールの『ザディーグ』に、地の果てのユートピアとして言及される。
28　フランス式のキックボクシング。

申し出る男女の誘いはお断りだ。極東の諸民族の緩く寛容な道徳では認められているが、われわれ西洋人の野蛮な習俗とは相容れないものだから。——というわけで寝るとしよう。今日はじつによくやった...

こうして僕らは完全なる没意識の中に落ちた。東洋の賢者、鋭敏なる修行僧専用の白いページだけが、僕らの旅の続きを語ることができる...

. . . .

ねえ君、よかったらここらでしばらく代わってくれないか。続きはまた今度にしよう。この話にはひどく疲れたし、なにしろ気持ちが悪くなった。

なにかひとつ、あの阿片の匂い、あの黄色い貧民層、あの煙を忘れさせてくれるような話をしてくれ。

ロチ——阿片の匂いも、カンの藁が焼ける臭いもしない話だって... そう、思い出したぞ。ある朝、僕は一匹の黒やぎと、石だらけの人里離れた寂しいところにいた。

西には、崩落した巨大な灰色の岩塊がダルマチアに向かって急勾配をなし、東には、暗鬱なヘルツェゴヴィナを見下ろす眺望が広がっていた[29]。

そこは国の境、山々の頂。この高みにおいて気温は低く、果てしない大自然の中で吸う空気は清浄だった。

緑はどこにも見当たらなかった。いま昇ったばかりの太陽は、この混沌とした岩石ばかりの風景の中、いたるところに光と影のコントラストを投げていた。

見下ろせば、朝霧の中、荒涼たるヘルツェゴヴィナが白く光り輝いていた。

ダルマチアはいまだ高い山々の影に包まれていた。ずっと向こうの方、岩山のうねりの果てるその先に、はるか遠くまでつづいているのがかすかに見える、——暖かな大気の中、ミルトとオレンジの木の香りに包まれて、なおもまどろんでいるようだ。

たいそう空腹だったので、昼食用に持っていた陽に焼けた黄金色のイチジクを黒ヤギと分けて食べた。

そのヤギは——厚かましいやつで、いかにも元気よく腕白そうで、カプール[30]風に鼻面にひと房毛を垂らしていた——、もらったイチジクに満足せず、まっすぐに立って、飛び跳ねては僕の口元から僕の分を奪おうとするのだった。

29　1880年、バルカン半島での紛争に際し、ジュリアンはフリードランド号にてアドリア海に遠征し、クロアチア、ヘルツェゴヴィナ、モノテネグロなどの地域を訪れている。

30　頭部中央に分け目を入れ、額の両側を出し、中央にふた房小さなリング状の巻き毛を垂らした髪型。オペラ歌手ヴィクトル・カプール（1839-1924）の名にちなむ。

なんて陰鬱なところだろう、このヘルツェゴヴィナという国は！

はじめ月世界を想わせるようなところに降りてゆく。

いたるところ石、石ばかり。木はない、緑もない、一面灰色の世界。
よどんだ湖のようにまったく静かな石の流れ、――ついでそれが大きくうねり、盛り上がって、ものすごい山をなす。

川が流れている。トレビニツァ川[31]で、古のステュクス[32]もかくありなむと思われる石の平原のただ中、石の河床を流れている。まるでそこの泥土が呪われているかのように、川沿いには草木が一本も生えていない、――それから川は、地下の奥底に流れ込み、消えてゆく。

ここかしこに白い花をつけた小さなミント、もしくはピンクのシクラメンの絨毯。――空中では、このくすんだ世界の上をフクロウたちが音もなく飛び交っている。

さらに行くと樹林地帯に達する。――はじめのうち生育の悪い潅木の茂み、――そのあと森になる。ヘルツェゴヴィナにしか見られない森で、針のような形をした石がいたるところに立ち並ぶ。木々の間から、なにか尖がったものが、石化した木のように突き出ているのが見える。

とびとびに小さな集落がある、崩れ落ち、焼け落ちて、うらぶれた小集落。――五年にわたる皆殺しの戦争がそこを通過していったのだ。スラブの山の住人たちは、廃墟となったわが家の外に立ち、怪しいものを見るような目で僕らが通ってゆくのを見守る。背は高く、髪は金髪。ベルトにはしっかりと短刀や短剣を携えている。

森のあとは平原になり、別の国となる。小麦畑、北方の作物――なにもかもが荒らされ、打ち棄てられ、住む者もない。

やがて古都が現れる、壁越しにミナレットの先が見える古い要塞。――古い跳ね橋、古い城壁、――こんもりと茂ったホタルブクロがその見事な紫色のみずみずしい花を石の壁一面に咲かせている。

都市とは名ばかりの町、トレビニエ[33]。いまだトルコ語とスラブ語が話されている東洋の市場の残骸、住人が去り無人の廃墟と化したイスラム教徒の地区。モスクにはあわれなトルコ人がいく人かうずくまり――出てゆかなかった老人たちだ――、塵埃に額づき、なおもぶつぶつとマホメットの祈りを唱えている。

オーストリアの新しくやってきた守備隊が、この廃墟の中を行き当たりばったりに宿営している。とある廃屋で、ドイツ語が飛び交う滑稽至極な会食風景に出会う。占領部隊の士官たちが、北から下ってきたドイツ娘たちと食事を取っているのだ。

31　不明。
32　黄泉の国を流れる河。
33　現ボスニア・ヘルツェゴビナ南端の都市。

オーストリア人たちは、ここにきたことを後悔している。この貧弱な国は、あんなに苦労して支配下に置く価値などなかったのだ。多額の戦費を費やし、多くの人命を失ってまで。これからだって野戦で不意打ちをくらうかも知れず、小競り合いで血を流し、人目につかないところで闇討ちに会わないともかぎらない。

スラブ人たちにしても、正直なところ、トルコ人による気紛れだがのんびりとした支配のほうがまだましだったのだ。昔はやり方さえ心得ていれば、今よりもずっと多くやりたいことがやれたのだから。

しかしながらオーストリア人たちは今後もそこに居座ることだろう。連中はもっとも急を要するところから占領作業を開始した。いくつかの記念碑と品々を選び、それに番号をつけ、本国で帝国の属領を示すところの黄色と黒の市松模様に塗り、それが何であるか十分見当がつくものだとしても、その上にそれが何であるかを、そのものの名の前にふたつのKの文字を添えて書きしるす。Kaiserlischen および Kaenigslischen の頭文字で、「帝国及び王国所有のなにがし」という意味だ。

KK門、KKベンチ、KK橋、KK兵営。すでにトレビニエにはそのたぐいものがオーストリア国内とまったく同じようにあちこちに見られるのだが、それらの標識が当地で目にする唯一の明るい色調をなしている。

町の真ん中の、広場に接したところに、謎めいた正方形の広い敷地があって、二十ピエ[34]ほどの高い壁に囲まれている。窓がなく、真新しい壁で、東洋風の黄色と緑のフレスコ画に、まるでアイロニーのように明るく彩られている。そこに入るには低い小さな入り口があるだけ。その上、人々に背を向けたがっているかのように側面から抜け道に通じている。

これは、出て行かなかったあるイスラム教徒（この国でも指折りの金持ち）のおふざけだ。これからトレビニエで起きることを見ないですむよう、こんな風に居館とハーレムと財産とを壁で囲ったのだ。

そのトルコ人と僕はおのずと意気投合した。

もはや祈りの時を告げるムアッジンの声も聞かれなくなったミナレットの上から、一連の打ち壊された家々、穴の開いた屋根、廃屋が望まれる。通りには、いまだ東洋の服をまとった通行人が何人かうなだれて歩いている。

ホタルブクロの花ですっかり紫色に染まった古い城壁の彼方に、田園地帯がわびしく広がっていて、かぼそいポプラの防風林、荒れはてた畑、破壊された集落が見える。遠くには森。そこから先は岩石地帯となる。地平線の彼方に、それはまるで原始時代の天変地異によって空まで持ち上げられた灰色の海の巨大な波のうねりのようだ。

一八七五年にスラブ人による大規模な反イスラム運動の口火を切ったのがこの小民族、その命運

34　旧単位で、約32.5センチメートル。

はいかなるものとなるのだろうか。当時、山岳地帯で反乱がはじまっていたこのヘルツェゴヴィナの名が新聞のいたるところに出ていた。

スラブ民族の中で唯一彼らだけが、宿敵に対し、つねにあからさまで激しい憎悪をむきだしにして正々堂々と立ち向かったのだった。彼らは若者たちを失い、土地の収穫と住む村を失った。そしていま、疲れ果てて倒れ、ゲルマンの流儀で札を貼り、掟を定める別の主人の支配下に置かれてしまった...

僕の話はこれで終わり。プラムケット、今度は君の番だ。

プラムケット――親愛なるロチ、僕の話は君のよりもっと退屈かもしれない。

そもそも僕の土地はうまく花が咲いたためしがない。いわばヘルツェゴヴィナのようなもの。かつてそれは熱い溶岩だった。今日では軽石が散らばるだだっ広い荒れ地となっている。いま現在もなにも生えていない――一輪の黄色い花さえも。

だから、どうか話をつづけてくれたまえ――そこでせめて一度、主人公がトルコ人でも、スラブ人でもなく、なかんずく君ではないような話をしてほしい。だっていつも同じような話ばかりだと、しまいにはいらいらしてくるからね。

ロチ――もういい、分かった。僕がつづけて話そう。

いま思いつくのは、もうじき十年前のことになるが、マルビナス諸島の南西百マイルの海上で鯨の群れに出会ったことだろうか。そのときの様子を話してやろう。

かの大波に出会える南半球のあの海域のことは、君も知っているだろう。そこに鯨もいたからってなんの不思議もない。だが、これから話す鯨の群れは、それこそ文字通りの大群で、まさに回遊群と呼ぶにふさわしいものだった。

場所は南緯五五度の地点。冬の朝、太陽が昇って間もない時刻だった。たしかに寒くて、寒暖計は零度を示していたが、天候はじつに穏やかで、つらいということはなかった。べたなぎの状態で、帆が張りの緩いカーテンのようにいく重にも襞をつくって垂れていた、――塩辛いこの冷えた空気は、健康的で、じつに爽快だった。

大波は、この海域ではほとんどいつも立っているのだが、そのときは緩やかで、遠ざかるにつれてだんだんとなだらかになっていた。その柔らかくて丸みを帯びた長い水の山脈は、重々しく水銀がうねっているようであり、冷めつつある金属が流れ出ているようでもあった。それは撫でるようにわれわれを持ち上げ、それから滑るように移動させたかと思うと、つぎの瞬間すっと降下する。こうして次々に過ぎて行くが、つねにまた別の波がやってくる。霧でどんよりとした空の下、大波は褪せた銀色で、曇った鏡のようなはっきりしない色合いを呈していた。

じっと動かず、漠として、輪郭のない、ビロードのような一面の霧が、黒い水平線上に重くかかっていた。そして陽の光の筋が、ここかしこに湿った光沢、帯状のきらめきを映し出していた――金

属状のそれらの波がところどころ研磨されでもしたかのように。

それは、ひとが海というものの広大無辺さを完全に知覚し、そこになにか不安のようなものを感じるように思われる、かのまれな瞬間であった。新旧ふたつの大陸の姿が、はるか彼方、北の方角に、海のただ中に沈み行くふたつの巨大な岬のように突き出ているのが見えた。しかしそうではなく、僕らはすでにそこを通過してしまっていたのだ。それらはずっと後方に退いてしまっていた。いまや、その無限の湾曲を地球の反対側の北極まで広げている、あの陰鬱な液状の動く砂漠のほか、もうなにも見えなくなっていた。

こうして僕らは、空恐ろしい力——そのときはたまたま活動を休止していたが——のただ中に、ひとり迷い込んでいるのに気がついた。

南半球に棲む多種多様な海鳥たちは、例によってこの小康状態に手を焼いていた。幾千となく滑車が軋むような声で鳴きながら上空を飛び交うかわりに、みな水面に浮かんで、鳴声を上げることもなく、波間に揺られていた。アホウドリや、マラモック、ハイイロミズナギドリ、黒と白のマダラフルマカモメなどの親子が漂っていた。彼らは羽根を休め、眠っているのだった。

親愛なるプラムケット、これは大海原の思い出だ。この話に出てくる健康的な空気を吸えば、中国旅行の疲れもすっかり癒えるだろう。

士官候補生だった僕は、そのとき当直に付いていた。空を眺めながらぶらつくほかに、なにもとりたててすることはなかった。

隣で、航路監視係が視線を遠く水平線の方に向けていた。——なぜだろう、この海域はいつだって僕らだけなのに。

「——西に鯨発見」と彼が言う。

なるほど、西方のはるかかなたに目を向けると、大鯨が噴気孔から吹き上げるあの潮の柱がいくつも見えた——遠方の暗い背景にきらきら輝く白い束。

鯨たちは急いでこちらに向かってくる。たぶん僕らが鯨獲りにきたのではないことが分かったのだろう。僕らのことを恐れておらず、僕らをひと目見ようとしていた。

暗鬱で、青ざめて、どんよりとしたその大海原を、大きな動物たちは狂ったように飛び跳ねていた。途方もなく大きいのや、子供っぽいしぐさで母鯨の周りを何度も回ったり潜ったりする幼い鯨がいた。

——こうしてこの群れ全体が、巨大生物らしくいかにも快活に、飛んでは跳ね、抜いては抜かれ、ものすごい速さで移動していた。——そしてどの噴気孔からも、左右に水が吹き上げられていて、それはあたかも、変化に富む複雑な池の噴水のごとく、日の光にきらめき、交錯する、盛大な打ち上げ花火のようであった。

あちらはこちらを眺め、こちらはあちらを眺めていた。すべての船員が船の手摺にそって一線に

並び、彼らをもっとよく見ようと押し合い圧し合っていた。

彼らは僕らを眺めていた、凪につかまって動かない塊となった僕らを。彼らのように動き回ることができない僕らの姿は、彼らにはじつに滑稽に映ったにちがいない。

かつてアメリカの捕鯨船で遠洋を巡ったことのある甲板長は、彼らがかくも安心しているのを見、捕まえることができないことに歯軋りしていた。彼は船倉から鮫を捕まえるための銛を持ってこさせ、一番忠実な部下、なんでもする十名ほどの甲板員を集め、海にボートを降ろす許可を得ようしていた。

だが鯨たちはすでに、ずいぶん長いこと自分たちがなんであるかを忘れていたと判断し、もとの隊列を組み直して、なだらかな波を突き、全速力で、ふたたび南に向けて進みだしていた。たぶん南極に向かっているのだろう。この調子で行けば、夕方には着くはずだ。

やがて彼らは、暗い無窮の霧と波の中、南極の方向に消えていった。闇に包まれたこの空の下、それはまるで古生物学時代の復元された一場面、――たとえばシルル紀の果てしない海を通過する、未分化の巨大な生物の群れのようだった...

ときにプラムケット、想像してみてくれたまえ。――この南海洋の記憶がよみがえったは、さっきヘルツェゴヴィナの話をしているときのことだった。

小から大へと、陸を数里にわたって覆う灰色の石の波から、本物の波、南半球を永遠にへめぐる無窮の大海原へと、話が移ったのだ。

じつのところ、僕が君に描いて見せたそのヘルツェゴヴィナは、あまりに奇妙で、あまりに現実離れしていた。あるいは後日、夜中に夢で見たものだったかもしれない。――つまるところ、かの小国は僕らの国からいくらも離れておらず、行こうと思えばだれでも行ける。目下僕らが提供している「文明の恩恵」なるものによって、近い将来あの国もずっと見栄えが良くなり、食料品屋の別荘が建つパリの郊外と同じくらい住みよいころとなるだろう。

どうしろというのか！僕の想像力は、ときに通常のものや状況を実際より大きく見せてしまい、かたや、実際に巨大なものや恐ろしいものにはもう驚かなくなっている。――あまりに多くを見すぎたがために、なにごとについても十分に正確な観念を失くしてしまったのであり、頭の中でも心の中でも、なにもかも雑然としてしまう。――もし人生をやり直せるものなら、それを複雑だった分だけ単純にしようと努めるだろう。

それに、悲しいかな！僕の印象は、はじめあまりに多く、あまりに雑多であっただけに、だんだんと薄らいでゆくのがよく分かる。――心を打つ印象は、もはや遠い昔の思い出にしか見出せない...

五番目のマリーゴールド

プラムケット――親愛なるロチ、僕がいま受け取った黄色い花は、君がいま退屈しているということ、それがはじめてではないということ、またそれが最後だとは思っていないということ、そし

て倦怠を君自身と一体であるとみなしているということを――それとなく――意味している。（つまり君は自分の感情を読者に共有させようとしているわけだが、もとよりそれは僕らの計画に適っている。）

ときに、なんでもないことで人生が甘美な享楽に目覚めるという、かの幸福な時期に出会うことがあるにしても、君は心のうちでこう思う。「それがどういうものかは分かっている、どうせ長続きはしない、ほんの小休止にすぎないのであって、過ぎてしまえば僕の思考は、いまや僕の支配的で通常の状態となっているあの暗い奥底にまた落ちてしまう。」

それは、君が存在しない一切のものを懐かしんでいることの証拠であり、存在するものの内に、賢明で分別のある人々の生命の糧である魅力を見出すことなく、幻覚に囚われたおのれの人格の中に閉じこもり、そうやって自分自身の犠牲の上に、君自身の内で作り出されるややこしい諸現象のままに、――どうにかこうにか――生きているということの証拠なのだ。

君は何であるのか？――僕らはみな何であるのか？――機械だ。――人間という機械は筋肉に覆われた骨組みからなる。内部には諸々の内臓、消化および呼吸器官があり、――組織に赤い液体を送り届ける（詩人たちがしばしば言及する）心臓と呼ばれる押し上げポンプがある。この機械は白または灰色の結節塊（白ワイン煮込みないし揚げ物にして美味（『ご婦人方の田舎家[35]』を見よ））によって作動させられており、その塊からは細い糸くずのようなものが出ていて、それが感覚器官や諸々の筋肉に達している。

外界に由来する運動が人間機械の器官に伝わると、それは感覚神経を通って脳内の神経細胞に伝えられる。その細胞からは筋肉に繋がる運動神経が出ている。――当の運動は、筋肉にまで伝播すると、結果としてそれを収縮させる。収縮しつつ、その筋肉は手足という梃子に作用し、それにある種のぎごちない運動を遂行させる。――ワルツの演奏が聞こえる。聴覚神経が一続きのリズミカルな振動をあなたの神経細胞に伝えると、それらは動き（踊り）だし、神経流を発して、種々の筋肉をリズムに合わせて収縮させる。こうしてあなたは六拍を要して一回転する。――加えて、あなたは腕に美しい女性を抱えている、彼女との接触、彼女の匂い、彼女の姿とあなたの周囲にあるすべてのものの光景、無数の外的作用（感覚的および想像的現象と呼ばれる）が、あなたの全感覚を振動させ、無数の他の脳細胞に激しい衝撃を与える、――そこに、事態の意外性のすべて、ワルツを踊るという単なる行為の外にあなたが行うかもしれないことの一切が由来する...

――しかし機械は思考し、ときに感動もし、熱い恋をする。それはバイロンであり、アルフレッド・ド・ミュッセであり、そして君でもある。――それは祈り、愛し、涙した。――幸福と呼ばれているものを知り、探し求める。――倦怠と苦痛をもまた（悲しいかな、あまりにもしばしば）知る。それは君であり、僕なのだ！... とはいえ、やはり機械！――その表皮を剥いでみよ、中身はいつも同じで、にやにやし、ぎくしゃくしてぎごちなく動き回る骸骨、――その上を、赤い物質に浸って白い糸くずが網状に覆っている。

35　ミエ＝ロビネ夫人著、家庭料理・家庭医学・家事・園芸に関する主婦向けの実用書。MILLET-ROBINET（Mme），*La Maison rustique des dames*. Librairie Agricole de la Maison Rustique，1884（初版か否か不明）。

主体の生理的特性、あるいは主体が獲得した習慣、――あるいは主体の種々の神経細胞間に存在する特殊な連繋――に従って、機械の動きはその時々でこうであったり、ああであったりする。個体間の諸々の相違の秘密の一切はここにある。ロチよ、おそらく君が感じる執拗な倦怠感と、大多数の人に対して抱く知的劣等感は、ほかならぬ君の習慣の奇矯さ、つねに常識の逆を行く君の習慣の奇矯さに由来しているのだ。

六番目のタンポポ

ロチ――親愛なるプラムケット、そいつは花とはいえない。君が僕に贈ってくれたのは、死体の骨、博物館から盗んできたなにかの古い脛骨だ。――そんな見苦しい、ひとを驚かしかねないものを、ねえプラムケット、予告なしに花束に入れるべきではないだろう。

今度は僕がひとつ話をしてやろう。なるほどそこには骨も出てくる――じっさい、おぞましい骨はあらゆる創造物の土台であり、骨がなければ人間は立つことができないというのも周知の事実だからね。――しかしその骨の周りには、溌剌として若々しい肉がたっぷりとついているから、それがじかに見えることはない。

これから話すのはアラビアが舞台で、『千一夜物語』の続きとでもいった話だ。――そして、忘れずにそこからひとつ教訓を引き出して、君にしかと示してやろう。だって君はあまり利発とはいえないからね。――それでもって君に、君はそれに異議を唱えたけれど、僕にだって首尾一貫したまともな物語を作り、それを教育的なものにすることができるというところを見せてやろう。

（続く）

2004/06/04提出